

---

# Twin Genesis Online

野衣本フーコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Twin Genesis Online

### 【Nコード】

N7157Y

### 【作者名】

野衣本フーコ

### 【あらすじ】

Twin Genesis Online VRMMORPGの革命児。他の追随を許さない圧倒的なスペックを以て世界最高のゲームとなる…筈だった。そう、ゲームの支配者たるAI 《ペンデント》の暴走が起きるまでは。

11/21 諸事情により、こちらで掲載させて戴く事になりました。

？

これは 俺の戦いの記録。

この記録をつけ始めてから何日が経ったか…。  
よく覚えていない。

思い返せば色々な事があった。

初日から冤罪で牢獄にされるわ、友人にも置いてかれるわ、またまた牢獄送りになりそうになるわ、それから ！！

キリがないので止めよう…テンション下がる…、

ゴホン…。

とにかく！！明日には全ての決着が着くのだ。  
今は万全の状態で挑む事だけを考えよう！！

最後に、もしも、万が一俺が“脱落”したら いや、有り得ないか、俺強いし。

無いこと書いても仕方無いか！！ハッハッハ！！

第99層 《エングダスタート》より記す

？

「まだか！？もう一時間は経ったぞ！！」

一際大きな盾を携えた大男の声が戦場を駆ける爆音を越えて届いた。

「《ベヒモス》のHP残量は！？」「二割弱です！！」「回復ヒールまだか！？クソツ！！」

飛び交う怒号や指示がここからだとよく聞こえる。

うんうん、中々良い眺めよのう（笑）

ん？ルイスのヤツ今『臆病者』呼ばわりしやがった！！バリーもガツンと言ってやれよ！！『アイツはそんな男じゃない！！』って！！

「《ベヒモス》のHP残量一割切りました！！」

おっと、出番みたいだ。

我らがリーダー、“白帝”ミカドが右手を挙げたのを合図に俺は動き出した。

第99層のボスモンスター《ベヒモス》の弱点であるその背後へとウイークポイント向かって走る。

え？気付かれたらどうするって？

愚問だな、ホント。

俺、今は透明人間だからバレないの（笑）

ほらな、背後に立っても気付かれな　　うおっ！？アブねーなオ  
イツー！！

見えてんじゃねーのコイツ…？

「早くしろ変態紳士！！」「壁の気持ち考えろや！！」「へマした  
らPKしてやるからな！？」「

その殺気、ベヒモスに向けるよ。  
遊びが過ぎたのは認めるけどさ…。

さて　、それじゃあサクッと倒しますか。

30分後。

それはもう鮮やかに背後から18連撃技をクリティカルヒットさせ  
てボス撃破！！

で、意気揚々と仲間のもとに戻ったわけですよ、そしたら…

『さて、アイテム全部出してもらおうか…？』『それじゃあ誰がメ  
イトを殺るかジャンケンな？』

皆さん、目が本気です。本気と書いてマジと読みます。

「何でだよ！？俺、役目は果たしたぞ！？」

抗議、猛抗議、命の危機で黙ってられるか！！

「テメエ…遊んでたろ…？」

ヤクザみたいな口調のこの娘はレイナ。

全身白のフリフリドレスみたいな格好のロリ顔少女は今日“も”どす黒いオーラを俺に“だけ”向けている。

要するにツンデレなんです。

デレた事無いけどね

「ハツハツハ、モテる男はツライな〜（笑）」

「お前ら下がってる、巻き添え食うからな。」

そう言っ取り出したのはこれまた真っ白なバズーカ

「…って、待った！！バズーカって対人用じゃないと思うんだケド！？」

「それぐらい知ってるっの、だからテメエ以外に向けたりしねえよ。」

俺って人として認知されてなかったの！？

「はじける」

「いやあああああッ!!」

これが、攻略組ギルド 《白龍》の日常である。

VRMMORPG“Twin Genesis Online”。  
実装版解禁日にログアウト不可となったこのゲームは、製作者の陰謀では無くこのゲームのGMたるAI“ペンデント”の暴走によるものらしい。  
唯一の脱出方法はゲームクリア、つまり100層のボスを倒す事らしい。

ここまでではありがちな話だな、漫画やライトノベルでもよくある鉄板ネタだ。

あとはプレイヤーが手と手を取り合い仲良く協力してめでたくクリア。

なら、どれほど良かった事か……。

『このゲームでは全員が戻る事は不可能です。』

それが、支配者からの最後の言葉。



と言つても、俺は聞いたわけじゃない。  
その言葉を直に聞いたのは当時のトッププレイヤーのみだ。

『“白”と“黒”、“魔王”の命を絶つた陣営にのみ与えられる権利なのです。どちらかを“犠牲”にする事で、現実へと戻る事が出来るのです。』

この世界のプレイヤーは二分されているというわけだ。

互いが助かりたいと思うほどに溝が深まっていく、悪魔のシステム。皆、恐れているのだ。

明日、ゲームがクリアされて、自分が消えてしまう事を。だからああやって気丈に振る舞つて、不安から逃れようとする。

“ただの”デスゲームなら、こんな思いも無いだろうに…。

もしかすると、ペンデントはとても人間的な機械A Iなのかもしれない。

ふと思ひ至つた時、アラームが鳴つた。

午前0時を告げる音が部屋に鳴り響く。

ベットから体を起こすとアイテム欄から一冊の本とペンを取り出す。ギルドの連中には内緒にしてある。

あいつらに見られたらと思うと顔から火が出そうだ…。

日記なんてそんなモンだよな？

誰かに見せるわけじゃないけど書く、強いて言うなら自分に見せるため、みたいなモンだよな？

本を開く。

1ページ目には『第10層 《ウォーラ》より』とだけ記されている。

そうそう、ここで全財産の半分も使って買ったんだっけ…。

その後も色々と書かれていた。

愚痴や喜び、痛み…。まるで昨日の事のように思い出せる。

最後の1ページ、白紙のページ。

「 第99層 《エンダスタート》 」

これで、おしまいだな。

そうだ、“約束”。忘れるところだったな。

『たとえ今日死ぬとしても、命尽きるその瞬間までは全力で生きる。諦めた者に奇跡は訪れぬ。』

この本の持ち主との約束だ。

「奇跡か…。」

皆が笑って終わられるハッピーエンド

奇跡があるというのなら、まさにそれだろう。

そんなものは無い。

解ってはいる。理解もしている。けど、

「 信じるのは自由だよな、

独りごちて、眠りについた。」

？

俺は今ゲームの中にいる。

VRMMORPGってヤツだ。名前くらい聞いたことあるだろ？

で、そのテの話には付き物の『ログアウト不可状態』だ。笑えねえな、ハハッ。

ん？なんでゲームに閉じ込められてるのに悠長に構えてられるのか……か。

簡単な事だ。

俺は脱出不可能なゲームの中で、囚われの身、だからだ。

「ウオオオオオオッ！！！！！」

走る。風を切るように走る。

「早くしないとおおおお！！！！！」

俺の横で、同じく全力で走っているのは親友の姿。入念にセットされていたであろうツンツン頭がグチャグチャになっている。しかし今はそんな事はどうだって良い。

「おい、貴史！！今何時だ！？！」

腕時計をチラッと見る貴史。

「あと五分！！ギリギリだ！！」

「チクショウ！！急ぐぞ！！」

「わかってらあ！！」

道を全力で駆け抜ける高校生の姿はさぞや恐ろしいものだろう。しかし、1つだけ断っておこう。

俺達はマトモだ。

いや、少々中毒気味のゲーマーである事は認めるが、何も気が触れた故の奇行ではない。

今日はVRMMORPG、“Twin Genesis Online”の実装版解禁日であり、版から“TGO”をプレイしている俺達としては何としてもスタートダッシュを決めたい。一秒でも早く家に帰りたいのだ。

考えてみて欲しい。

クリスマスの夜、プレゼントが待ち遠しくてなかなか寝付けない時のあの高揚感。それに似た感情が昼休み辺りから胸を占めて、家に帰りたい衝動を自制心総動員でなんとか押さえ込んでいたのだ。

反動でこんな風になっても仕方無い　　のか？いや、仕方無い筈だ！！

ここから家まで約三分。部屋着ジャージに着替えるのに一分。間に合うか…

!?

そこから俺は一切の思考を止め、力の限り走った。

「ただいまあッ!！」

母の『おかえり〜。』という呑気な返事を待たずに玄関横の階段を二段飛ばしで駆け上がる。

「あと二分しかねえ!?!」

ドアを開けると時計が目飛び込んだ。タイムリミットまで時間は殆どない。

こうなる事を予測していた俺は予め用意しておいたジャージに着替えると、同じく待機状態でセットしておいたVR用機器“アナザー”を慣れた手つきで装着する。

制服が脱ぎっ放しだが、この構ってはいられない。起動スイッチをONにすると、突然睡魔に襲われ、意識が途切れた

気が付くとそこは闇の中だった。

『バグか!?!おいおいマジかよ…。』と溜め息をつこうとしたその時、いつの間にも現れたのか、目の前でピエロがこちらをじっと見て

いるのに気が付いた。

しかも光ってるよな、この人…。

真っ暗な中、電球のように光り輝く姿は不気味さをより一層引き立てている。

実装開始記念のイベント…なのか？

若干腑に落ちないまま、一言も発しようとしないうちにピエロに恐々といった感じで問いかける。

「あのお…?」

すると、まるで彼の意を汲んだかのようにピエロが口を開いた。

「1ツ、選ビナ、」

いつの間に取り出したのか、両手にはそれぞれ1つずつ小さな立方体の箱を乗せてこちらに差し出している。

「黒と白の箱…。」

やはりイベントの類だったようだ。ホッと胸を撫で下ろすと同時に目の前の二つの箱を睨む。

むづうう…ッ!!

目を見開いてよく観察する。が、何も見えてこない。当たり前だが。

悩み処だな…。

貴史には悪いが、しばらく待ってもらおう事になりそうだ。

いや、アイツも今頃は箱と睨めっこの真っ最中か。

俺は、もう一度それらをよく見るために、E口に向かって一歩踏み出す。と、

コッ…。

何か硬いモノが右足の爪先に当たった。

「?」

何も無いようだが…?

もう一度右足をツンツンと前に出す。

コッコッ、

やっぱり何かある。

しゃがみこんで足のあった位置を目を凝らして探す。

はたして 何も無いように見えた足元には、暗闇に同化していた“3つ目の箱”があった。

透明な箱、硝子に似た硬質な素材でできているようだ。

「これでもいいですか?」

拾い上げたそれを振って見せる。



「本当二、良インダネ？」

3つを見比べる。元から差し出されていた2つと下に転がっていた透明な箱。

勿論、生粋のゲーマーの彼がどの選択をするかなんて決まっている。

「ええ。」

「ソウカイ…。マ、頑張りナ。」

辺りが眩い光に包まれていく中、ピエロがニヤリと笑った、ように見えた。

気が付くとそこは野原だった。

辺りを見渡すと、他にも寝起きのように突っ立ったままのプレイヤーが数名。

どうやら無事に始まったらしい。

視線を落とすと服装もジャージからボロい服

版の時と同じ

初期装備になっている。

もう一つ気になるのは外見だが、よく考えてみると、確認の必要性が無い事に気付いた。

TGOではよりリアリティを追求するため、ゲーム開始前にプレイヤーの、顔も含めた身体情報を予めVR機器のハードの方へ入力している。それを採用している。

そこまで確認したところでまたしても視界が暗転した。しかし今回は版で経験済みのチュートリアルが開始したのだと解っていたため先程のように驚いたりはいしない。

目の前で丁寧に解説されている既知の情報をスキップで飛ばし読みする。

この辺に性格が表れると言うのが本当らしい。熱心に聞いているプレイヤーとスキップを連打するプレイヤーの2つに別れている。と言っても後者の数は圧倒的に少なかった。

「おっ、貴史いるじゃん。」

少し離れた位置で予想通りチュートリアルを受けていた。

昔から説明書を読み込んでからゲームに取りかかるアイツの性格のせいで何度かケンカになった事さえあった。

と言っても、もう何年も昔の話だ。俺だっていつまでもガキのままじゃない。とりあえずチュートリアルが終わるまでの間、システムウィンドウを開いてステータスやら初期アイテムやらを確認して待つことにした。

まあ、確認と言っても初期ステータス位しか見るものないんだけどね。ほら、アイテム欄はこの通り空な　　ん？

何かが右隅にひっそりと収納されている。サイコロ状の透明な箱

さつき貰ったアレだ。

調べてみるか。

しかし、ちょうどチュートリアルを終えた貴史の呼ぶ声に遮られる形となった。

なに、調べるのは後回しでも問題無い。それより今はMob狩りが最優先事項だ。今日中にLv5まで上げておきたい。

話し合いの結果、プレイヤーで飽和状態の草原を離れて少し難易度の高い森の方へ場所を移す事にした。

「それじゃあ俺がMobのタグ目標とるからメイトは背後に回って攻撃してくれ。」

「了解、バリー。」

バリーは貴史、そしてメイトは俺のTGO内でのネームだ。

バリーは昔いたスゲー野球選手から採ったものらしく、オンラインゲームではときどきこの名を用いている。

俺の方は“ナイト騎士に成りきれない”というブラックジョーク的なものだ。何となくしっくり来たため使っているだけで深い意味や拘りは無い。

おっと、早速コボルトのお出ました。

すくさまタゲをとったバリーが俺と向かい合うように移動、ちょうど敵がこちらに背を向ける形となる。

『いいか、Lv1の俺達がLv4のMobと真っ正面から勝負を仕掛ければ苦戦を強いられるだろう？だから殆どのプレイヤーはしばらく手を出さないはずだ。』

数分前に聞いた言葉を思い出す。

『そこでだ、真正面からじゃなくて背後から狙えば良い。』

コボルトの背を短剣で一閃。  
甲高い悲鳴を上げてこちらを睨む。作戦通りだ。

その隙に距離を詰めていたバリーがコボルトに斬りかかる。  
一撃、二撃、三撃と放たれた攻撃はコボルトのHPを全て奪い去った。

無数のポリゴンとなって消えたのを確認して二人はハイタッチを交わした。

狩りを始めてから三時間。リアルタイムで進行しているTGO内も現実同様日没寸前となっていた。  
他のプレイヤーを見かけたのはつい30分程前の出来事で、それまではまさに独占状態だったため、予想以上の成果を上げることが出来た。

「今日はこんなモンだな。」

Lv8になったバリーが、レベルアップを知らせるファンファーレの鳴る中、満足気に頷いた。

「そうだな、それじゃあ街でドロップ品の換金でもして落ちるか。」

「ついでに武器も見ようぜ?」

「だな、さすがに短剣一本じゃな。」

「このみすばらしい服もなんとかしたいし。これじゃまるでゴジキだ。」

ワハハハと笑いながら街を目指す俺達。

そう、その時俺達はまだ知らなかったのだ。これから起こる出来事を、自分達の運命を。

《現在》

メイト      L V 8

バリー      L V 8

?

「結構人いるな。」

日はすっかり落ち、辺りも暗くなっているにもかかわらず街はプレイヤーで賑わっていた。

フィールドへと繋がる街の大通りは人々の活気で満ちており、テスト時はほぼ皆無だった生産職の職人プレイヤーの姿もチラホラと見受けられる。

あ、あの食材見た事ないな。実装版の新アイテムかな？おっ！！あの斧アックスカッター！！値段は……って三万！？あの職人正気か！？

「メイト、余所見してるとぶつか」

ドソッ

「きゃっ！」「おっと、」

『すみません』と言う直前、けたたましいアラーム音が街に響き渡る。

「え、何、警告？？？」  
WARNING

突然目の前に表示された赤色の警告文に目を白黒させる。

警告文は重大なマナー違反などを犯した時に現れる。

故意にならともかく、両者不注意でのアクセシビリティ、それもぶつかっただけで表示されるなんてまず有り得ない事だ。

因みに、TGO内における違反行為の処罰は全てこのゲームのGMであるAIの裁量で決まる。例外として他プレイヤーへの違反行為を行った場合は処罰の有無のみ被害者であるプレイヤーに決定権が託される。

流石にこの騒ぎで周りも気付いたらしい。野次馬が集まり始めている。

冤罪なのだから別に気にする必要は無いのだが。

ほら、彼女だってニッコリ微笑みかけて

“通報” ボタンを押した。

「ちよっ!?!」

『なんで!?!』と詰め寄る前に景色が薄くなって行く “強制転送” だ。

視界が完全にホワイトアウトする瞬間、俺は見た。信じられないといった表情を浮かべたバリーが憤然として彼女に詰め寄ったのを。

呆然としたまま俺を見る彼女を。それはまるで重大なミスでも犯したかのような目だった。

「参ったな…。」

ここは牢獄の中。

迷惑行為を働くような集団のためのものであるのだが、実装版開始からもの数時間で十名弱が御用となっていた。

俺もその中の一人だが。

まさか自分がイエロー（マナー違反者のプレイヤー名の色が一定時間黄色に変色する事からそう呼ばれる。）になるとは……。確か、プレイヤー間のトラブルは一律一週間の投獄ペナルティが課せられる。

『快適にプレイしていただくために』という企業側の配慮が今は無い。

唯一、冤罪を晴らせばここからおさらば出来るわけだが、冤罪を証明するには少々厄介で、先程ぶつかつた女性の力が必要だ。

更に言うところの牢獄、M o b が出現するフィールドの中に存在する。流石に檻の中にまでは入って来ないため急ぐ必要は無いが、彼らがここにたどり着くには最低でも一度はM o b とエンカウントする事になるはずだ。この周辺にはLv5以上のM o b がウヨウヨいるためたどり着くのは困難だ。

特に夜は攻撃的なモンスターが多く、Lv10にも満たないプレイヤーがたどり着ける筈がない。

スタートダッシュを切った自分でさえLv8の今、Lv10を超えるプレイヤーが果たして何人居ることやら……。居るならば、そいつは間違いなく現時点でトッププレイヤーの一人だ。

「バリー、頼んだぞ……。」「

唯一の頼みの綱である友人を名を呟くと、ウィンドウを開いた。時刻は20時を過ぎている。予定時間を完全にオーバーしていた。きっと今頃は夕飯を食べに来ない息子を心配した母親が二階に上がって来ている事だろう。

早く戻らないと『夕飯抜き！！』なんて事も……。



「昼もバリー貴史との話に夢中でろくに弁当に手をつけてないってのに……ッ……！」

「バリーには悪いが先に落ちよう。どうせ何も出来ないわけだし。」

「俺は『フレンドリスト』の一番上に表示されている『バリー』の文字をタッチすると、『今日は先に落ちる、スマン……！』と書いたメールを送った。」

「さて、落ちるか。」

「ウィンドウの左端下、『ログアウト』の部分をクリックしようとして」

「あれ？」

「『ログアウト』ボタンが無い。」

「あのっ……！」

「あん？何だ、兄ちゃん、改造データなら売れねえぞ？GMにそのテのモンは押収されちゃったからな」

「いや、そんなんじゃない無くてですね、確認したい事がありました。」

「確認だあ!？」

面倒くさいといった様子で顔を顰める。その表情が強面の彼の顔をより一層恐ろしいものにしてている。  
リアルなら関わり合いになりたくないタイプのプレイヤーだが、緊急事態だと割り切って会話を続ける。

「ウィンドウのログアウト部分を見てもらえませんか？」

「ウィンドウだあ?何なんだよ……たくよお。」

渋々、といった感じでウィンドウを開いた。(他プレイヤーのウィンドウは見えない仕様なのだが、手を宙にかざすというウィンドウを開く時の動作から解った。)

しかし、視線が左に動いた瞬間、表情が一変した。

「ログアウトボタンが……消えてやがる……っ!?!?どついう事だ!？」

バツとこちらを睨み付ける男に応える代わり、天を仰いだ。

マジかよ…ッ!!

『すぐにもGMにメールを』と、抗議のメールをうち始めた時だった。

“それ”が漆黒に染まった夜空に現れたのは。

「何だよアレ……？」

空より深い闇を纏ったそれは圧倒的な存在感で、暴力的とさえ呼べるものだった。

「……………！！！」

その存在に、呑まれていた彼を呼び戻したのは硬質な機械音。

『グランドクエストを受注しました。』

メッセージ欄の文字に誘導されるように《クエスト一覧》を開くと

確かに受注されている。

~~~~~

〈グランドクエスト〉

十の国の十の層、全ての門を開きし時、真の門は開かれる。  
門を開くは英雄の手。

ゆめゆめ忘れる事勿れ。

行く手を阻むは一人の門番、避けては通れぬ定めなり。  
ゆめゆめ忘れる事勿れ。

命絶たれしその時に、魂は皆囚われる。

真の門が開きしその時に、全ての魂は解き放たれん。

「大予言者カツサンドラ最後の予言」

~~~~~

なるほど、

「具体的な指示…なくなね？」

ていうか解り辛いな、オイ！！

「英雄…ってのは俺達の事か？門…はアレだから、門番はボスモンスターか。」

時の記憶を辿って推理を始める。

「十の国、十の層はそのままの意味として…真の門ってのは…？」

まだ層があるってのか？厄介な。

「兄ちゃん、バカか？」

先程の柄の悪いオッサンが絡んできた。

「真の門ってのはだ、このゲーム自体、つつうこった。」

「オッサン…天才なのか！？」

人は見かけによらないと言つが、本当だな！！

「ハツハツハ！！ちょっと考えりゃ誰にでも解るさ、んな事。」

口ではそう言っているが、先程までの仏頂面が満面の笑みになっている辺り、どうやらまんざらでも無いようだ。

すっかり機嫌を良くしたオツサン（ダンパと名乗った。プレイヤー名は表示されているから既に解っていたが。）は残りの解説もしてくれた。

「この“魂は囚われる”ってところ、ここだ。これは“死んだらゲーム終了まで復活出来ねえ”って意味だ。ま、死ぬよりはマシだろうがな。」

「へえ…てつきりデスゲームってやつかとはっつきり…。」

「あゝ、一応デスゲームではあるな。」

「どづいつ事？」

「いいか？“魂が開放される”のはいつだ？」

「ゲームクリアした時。」

「じゃあ、もしもだ。」

「？」

「全員が死んで、捕らわれの身になっちまったら…どうなるよ？」

「そりゃあ……。」

誰も復活出来ないから……っ！？

「一生閉じ込められたまま!？」

「そうなるな、」

「デスゲーム……。」

漫画やライトノベルで何度も読んだのを思い出した。

主人公が活躍する様子を羨望の目で見ていた事も。

これはチャンスかもしれない。

俺が、皆を救う。英雄になるチャンスかもしれない。しかし……。

「一週間のペナルティ……。」

このままでは、かなりの差をつけられる事になるだろう。

いくら テスターとは言ってもすぐには追い付けないだろう。

それに情報だ。

なんと言っても情報は武器になる。

しかし、殆どの行動を制限されている牢獄内ではプレイヤー間で行われる情報交換のスレッドのアクセス権限が無いため、浦島状態に陥る事は必至だ。

重くのしかかるアドバンテージ。

「……拙くね？」

トップどころか中堅プレイヤーになるまでにどれだけ時間かかるんだよっ!?

「ま、やるしかねえだろ。」

やるしかない。

「……そうだよな、やるしかねえよな……よしッ!」

両頬を叩いて喝を入れる。

「その意気だぜ、メイト。」

鼻息も荒く意気込む彼をニヒルな笑みを浮かべて見ているダンパだった。

牢獄で過ごす事7日間、晴れて懲役期間を終えて街に転送された俺は、時からの行き付けの、NPC経営の酒場でアクセス権が回復したスレッドを貪るように片っ端から見ていた。

まず気になるのは現在の攻略進行度だが、なんと5層まで攻略済みらしい。

時は一週間かけて3層にたどり着くのがやっとだった事を考えると脅威的なスピードだ。

そして驚くべきはボスモンスターの攻略人数。

その数、たったの8名。

次層へと繋ぐ門<sup>ゲート</sup>。その開門者の名を記す石碑が門の横にあった事がそれを証明している。らしい。

8人であの門番達を……？

正直、俄には信じがたい話だ。

デスゲームと化した今、8人でボスに挑む剛胆さにも呆れかえるばかりだが、何よりもその実力はゲームバランスを崩壊させんばかりだ。

「その8人が仲間割れしてるのを見たあ？嘘くさ……。」

『方向性の違いによる解散』

つて、歌手グループかよッ！！

『ギルド分裂か？』

『ギルドリーダーとサブリーダーが新ギルド旗揚げ？』

『知り合いがギルド加入を打診された』など、眉唾モノな書き込みが多数。

一通り目を通した俺は、注文してあったミルクの残りを一気に飲み干すと代金3ツーカーを払うためウィンドウのアイテム欄を開く。

「あ……そっいや換金まだだったな。」

アイテム欄に収納されたままのドロップ品を何となく確認している  
と、

「これは……？」

アイテム欄の左端に表示されたそれは、初日見た透明の箱  
で



はなかった。

「sole ability “ファントム”」

これが俺の運命を大きく変える事になるうとは  
なかった。

俺はまだ知ら

そつえばバリーは？

《現在》

メイト

LV8

### PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7157y/>

---

Twin Genesis Online

2011年11月22日01時14分発行